日本特殊教育学会第 54 回大会（2016 新潟大会） ポスター発表 P11-20

交流教育における健常児にとっての接触の質を構成する要素

楠見友輔
（東京大学大学院教育学研究科）
KEY WORDS: インクルーシブ教育　交流及び共同学習　接触の質

（目的） インクルーシブ教育の必要性が国内外において高まっている現代において，教育において障害児と健常児の交流教育を推進し，健常児の障害理解や障害児（者）に対する肯定的態度形成を促進することが求められている。しかしこれまでの研究では効果的な交流内容についての検討が十分に行われてこなかった。先行研究では，集団間接触が有効に機能するためには接触の質・量を検討することが必要とされており（河内，2006），特に知的障害児・者との接触と態度形成の関係に関する先行研究では，接触の質の高さが障害児（者）に対する肯定的態度形成に有意に関係することが明らかにされている（Keith, Bennetto, & Rogge, 2015; McManus, Feyes, & Saucier, 2010）。このことから，接触の質を構成する要素の解明が，健常児にとって効果的な交流内容を検討する上で重要であるといえる。

先行研究において接触の質は，健常児による知的障害児との相互作用の全体的な調子についての評価（Keith et al., 2015）とされており，本研究ではそれを「健常児の交流内容に関する肯定的か否定的かの評価」と捉える。データ収集手続きでは，知的障害児集団と健常児集団の間で行われた交流をビデオカメラで記録し，交流に参加した健常児にその映像を見せながら交流内容を評価させた。分析では，それらの発話の定性的コーディングによって，接触の質を構成する要素に関する概念生成を行い，生成された接触の質を構成する要素と参加者ごとの発話頻度との関係を量的に分析した。

（方法） 20XX 年に全 4 回行われた国立大学附属知的特別支援学校中学部と同大学附属高等学校の交流について，ビデオカメラによる記録を行った。ビデオカメラの記録を編集した映像資料を見せながら，交流に参加した高校生（以下，協力者）のうち 10 名を対象に再生刺激法インタビューを行った（ビデオカメラによる記録に関しては，両校の管理職の許可を得，インタビューに関しては本人へのインフォームドコンセントを行った）。

表１：実施された交流行程

日程	行程
第1回	自己紹介→合奏合唱練習1→風船バレー→話し合い
第2回	合奏合唱練習2→教室外活動（3グループに分かれ，1グループは調理・ゲーム，2グループは遊園地での遊びを行った）→活動報告会
第3回	文化祭打ち合わせ→ステージ発表→文化祭の体験・販売
第4回	音楽→終わりの会

インタビューは上記の 12 行程それぞれに関して，①どんな気持ちでいましたか，②特別支援学校の生徒の印象はどのようでしたか，③印象に残っている出来事はありますか，④自分にとってどんな発見・学びがありましたか，⑤疑問点はありましたか。の 5 項目について行った。インタビュー時間は各生徒約 90 分とした。インタビューデータの中から，協力者が交流内容を肯定的か否定的に評価している発話を抜き出し，その観点について定性的コーディングを行い，カテゴリーを生成した（表２）。その後，各カテゴリーに関して，発話者毎の相対発話数を算出し，そのカテゴリーごとに発話頻度の平均値(d)と標準偏差(e)を求めた。そして，$e/d\times100$ によって各カテゴリーの変動係数(f)（バラつきの大きさ）を算出した（表３）。

（結果） 定性的コーディングによって，以下の 6 カテゴリーが健常児にとっての接触の質として抽出された。

表２：健常児にとっての接触の質を構成する要素

カテゴリー名	説明	発話例
活動の形式	参加した活動が直接的か間接的か，少人数か，教師の介入があるかなど	交流をやっぱしてるなっていうのは…直接的な関わりがあるときですかね。
感情の強さ	一体感や共感を抱く，楽しいなど，快感情が高まること	みんなで同じことをしてる時は凄い楽しいし。私たちも一緒に楽しめる内容だったので。
地位の対等さ	障害児との間に気持ちや活動内容における不平等が感じられないこと	外に出る活動は…今までの活動の中で普段友達とするようなことと似ていて…交流してるなって。
協力的環境	双方向的なやり取りがあることが感じられること	バレーボールとかできないけど。こういうのだったら一緒に楽しめるから，凄いいいなって思いました。
位置関係	物理的・心理的位置が近いかどうか	この立ち位置だと，すごい同じ距離から指揮者を見る感じとかも，一緒に合唱してる感じが。
他者理解可能性	障害児についての視覚・聴覚情報を得ることができるかどうか	やっぱ知ると理解も深まるし。日常的にこういうことやってるんだな。できることもそれこそわかると思って。

表３：各カテゴリーの変動係数

カテゴリー名	使用者数	平均値(d)	標準偏差(e)	変動係数(f)
活動の形式	9	.345	.197	57.2%
感情の強さ	8	.180	.121	67.1%
地位の対等さ	8	.175	.163	93.1%
協力的環境	8	.164	.112	68.4%
位置関係	9	.260	.126	48.6%
他者理解可能性	8	.121	.086	71.3%

※変動係数は大きいほど発話頻度が二極化していることを示す。

（考察） ①健常児にとっての接触の質を構成する要素として，〈活動の形式〉〈感情の強さ〉〈地位の対等さ〉〈協力的環境〉〈位置関係〉〈他者理解可能性〉の 6 カテゴリーが生成された。交流の計画や実践において，これらのカテゴリーに留意することが，交流の通した障害理解や，障害児（者）への肯定的態度形成を促進すると考えられる。

②各カテゴリーにおいて，協力者間で注目する割合に変動の多寡が見られた。特に話者間の発話頻度のバラつきの小さかった〈位置関係〉〈活動の形式〉については，参加者の特性によらず多くの健常児に共通する接触の質を構成する要素であるということができる。バラつきの比較的大きかった〈地位の対等さ〉〈他者理解可能性〉〈協力的環境〉〈感情の強さ〉については，それを用いやすい参加者と用いにくい参加者に分かれ，参加者が交流に何を求めているか，また趣味や性格などに関係していることが示唆される。

（KUSUMI Yusuke）